

かみす

Pick up

- ▶「今年も神栖つかエールクーポン」再販
- ▶新型コロナワクチン接種

まちの魅力再発見

特集

港の消防署

海と陸から市民を守る



青空が広がる港公園。隣の船だまりには、訓練を終えた消防艇かみすと水難救助隊の姿が——。鹿島港には、コンビナート災害や大型船舶の事故などにも対応する消防署があります。取材中も、出動指令が何度も発出されるなど、常に緊張感が漂っていました。海上と陸上から市民を守る、鹿島港消防署の仕事に迫ります。

AR 広報かみすが
動き出す



[COCOAR2]



アプリをダウンロードし
表紙にスマートフォンを
かざしてください。
詳細は18ページ

特集

港の消防署

海と陸から市民を守る

鹿島港の中央に、大型船舶火災やコンビナート災害にも対応できる消防署があります。鹿島臨海工業地帯を守るための備えや、海上防災の要となる消防艇かみすの活躍など、重要港湾の安全を支える消防の仕事に迫ります。



水難救助車の車内には装備がずらり



(左から)水難救助車、高規格救急自動車、水槽付消防ポンプ車など港湾災害に対応する車両を配備



鹿島港の中央、港公園の近くに鹿島港消防署がある



消防艇かみすの放水砲



消防章は雪の結晶がモチーフ

鹿島臨海工業地帯の防災拠点

火災や事故などの現場へ真っ先に駆け付け、人の命と暮らしを守るために活動する消防士。その姿は頼もしく、勇敢なヒーローとして子どもたちの憧れの的となっています。

ところで、一般住宅がないところにも消防署があるのを知っていますか？ 港公園に向かって車を走らせると、工場群の中に鹿島港消防署が姿を現します。鹿島港中央の船だまりに面し、まさに港の防災拠点と呼べる立地です。

鹿島港消防署を訪ね、消防司令の増崎誠嗣さん（機関長）にお話を聞きました。

「私たちは、主に鹿島臨海工業地



鹿島港の海上防災の要である消防艇かみす。水柱は海面から約100メートルの高さに達する

帯の港湾に面する地域で発生する災害や事故に対応しています。鹿島港は、危険物を積載した大型のタンカーや貨物船の入港が多く、一度事故が発生すると大規模な災害となる恐れがあります。災害を早期に収束させることが極めて重要なため、日頃から企業と連絡を取って船舶の構造や危険物などの情報収集をしたり、海上保安庁・警察・企業と合同で大規模な海上防災訓練を実施したりしています」



鹿島港消防署

重要港湾・鹿島港を守る

こうして話を聞いている間にも、

いばらき消防指令センターから次々と災害発生が入電があり、署内に放送が流れます。船舶内での油漏れにより鹿島港消防署に出勤指令が発出されると、消防隊員が防火服を身にまとい、大型化学消防ポンプ車に乗り込み、サイレンを鳴らして出勤。迅速な行動と物々しい装備に、消防の仕事の大変さを肌で感じました。

その様子を見守りながら、署長の黒沢道生さんが興味深い話をしてくださいました。「大型化学消防ポンプ車・大型高所放水車・泡原液搬送車は、コンビナート火災対応の3点セットと呼ばれています。平成15年の十勝沖



黒沢署長



水難救助隊

地震で苫小牧の原油貯蔵タンク火災が発生した際は、うちの消防本部から北海道まで3点セットが応援出動しました」

全国にも数少ない特別な装備を整えているのは、重要港湾・鹿島港を守るため。ちなみに、今回の出勤は大事に至らず、ほっと胸をなで下ろしました。

水難事故から命を救うために

もう一つの重要な任務は、水難事故への対応です。「近年のアウトドアブームにより釣りなどのレジャー目的で鹿島港を訪れる人が増えています。昨年発生した遊漁船と貨物船の衝突事故は記憶に新し



防火服を身にまとう消防隊員

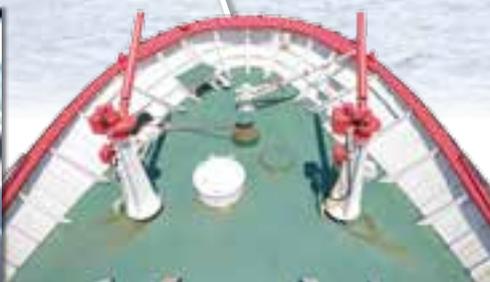
探険!

操舵室の窓。丸い枠の内側のガラスが
回転し水しぶきを取る



消防艇かみす

船の横側にある集合放水管



操舵室の君和田船長。写真上は放水砲の操作パネル

消防ポンプ自動車15台以上の放水能力

巨大なエンジンと増崎機関長

直すような厳しい訓練も行ないます。いざ事故現場の海に潜れば、隊員の姿が見えず、陸上と違い声による指示も届きません。日頃の訓練を通して互いに強く信頼し合い、活動することが必要です」



いところですが、他にも釣り人が高波にさらわれる、遊泳中に離岸流で流される、車が誤って海へ転落するなど、さまざまな水難事故が発生します」と増崎さん。
事故現場が沖の場合は消防艇かみす、それ以外は水難救助車での出動となります。水難救助隊の活動は危険と隣り合わせで訓練も過酷だと、消防司令補の君和田知之さん(船長)が話してくれました。

消防や巡視で活躍する 消防艇かみす

鹿島港の海上防災の要となるのが消防艇かみすです。初めて配備されたのは昭和50年で、現在は平成13年に建造された2代目が活躍しています。消防司令の土肥政弘さんは、両方の消防艇で船長を務めた経験があります。

「初代は喫水(船体が沈む深さ)が浅いため波に弱かったのですが、2代目は喫水が深くなり海のうねりにはビクともしなくなりました。馬力が大きいエンジンを積み機動力も高めています」

消防艇かみすが出動するのは、船舶火災や危険物の流出、水難事故などが発生したときです。それ以外にも、港湾内の異常をいち早く察知するため巡視活動を日々行なうほか、年に数回は習熟訓練や夜間訓練を実施。夜間の海は数メートル先の堤防の切れ目も分からないほど真っ暗なため、投光器で照らし、見張りを立て、慎重に航行するそうです。

操舵室から機関室まで見学!

さあ、いよいよ消防艇かみすの見

学です。案内してくれたのは、機関長の増崎さんと船長の君和田さん。鮮やかな赤と白に塗られた船体が青空と海に映え、間近に見ただけで気持ちが高まります。

全長28メートル、総トン数約68トン、最高速度20ノット。大型船舶火災やコンビナート災害、危険物火災に対応するため、海面から14・5メートルまで伸びる放水塔と、毎分3万リットル(消防ポンプ自動車15台分)の能力をもつ消防ポンプ、泡消火薬剤9千リットルを装備しています。

甲板の上には、扇型に並んだ放水砲や救命艇が見えます。船室の2階はモニターや計器類が並ぶ操舵室。1階には救護室兼作戦室があり、救助された人の応急手当ができるよう救急車と同じ資機材が積んであるとのこと。その下には隊員が宿泊する部屋があり、さらに階段を下りると巨大なエンジンで埋め尽くされた機関室。ここは増崎さんの持ち場です。「もし航行中に故障しても、自力で応急処置をします。この部屋が暑いのは、いつでも出航できるようにエンジンの冷却水を加熱しているからです。職場体験学習で来署した中学

生にも、消防艇かみすを見学してもらいます。将来、消防士になって鹿島港消防署で働きたい、と思っただけの「と笑顔を見せる増崎さん。そう話しながらエンジンに注ぐ視線に、愛情があふれていました。

美しく迫力満点の放水

これまで消防艇かみすは、1月の消防出初式、5月の港公園ワクワク体験フェア、7月の海の月間など、さまざまなイベントで放水を披露してきました。真上に放水すると水柱は海面から約100メートルの高さに達し、圧巻の一言です。

今年の3月7日には、消防艇全国一斉放水が行なわれました。これは、新型コロナウイルスと闘うすべての人を元気づけ、勇気づけることを目的としたもの。全国23カ所の消防機関が参加した初の取り組みです。



コロナ禍での青いカラー放水

この時、消防艇かみすは「少しでも人々の不安を解消したい」との願いを込め、青色のカラー放水で青い鳥が空へ羽ばたくイメージを表現。感染防止のため事前告知はしませんでした。たまたま目にした市民から「迫力があつた」「青色がきれいだった」など喜びの声を聞くことができたそうです。

市民の安全と安心のために

消防職員の日々の勤務は2班制で、朝8時半から翌朝8時半までの24時間勤務。休憩中や仮眠中でも災害があれば即出勤となるため、常に緊張感をコントロールしなければなりません。それでもなぜこの仕事を続けられるのか、増崎さんに聞きました。

「これまで従事した消防の仕事すべてが、やりがいと充実感に満ちたものでした。困難なことや肉体的に

つらいことも多々ありますが、どんな時でも、前向きに考えて頑張ることを肝に命じています。

私に限らず、消防職員は全員、市民の皆さんの安全と安心のため職務を全うするという強い使命感を持って働いています。これからも、市民から愛され、親しまれ、そして信頼される消防になれるよう、職員一丸となって努力していきます」

最後に黒沢署長から市民の皆さんへ、「海や川など水辺のレジャーは、ライフジャケットを着用して安全に楽しんでくださいね」とのこと。水難救助の仕事を知ると、その言葉が重く響いてきます。



市民の安全・安心のため今日も出動